

平成 26 年度第 2 回大阪府立泉北高等学校学校協議会 議事録

1 日時：平成 26 年 10 月 29 日（金）15：10～16:10

（14:20～15:05 授業見学を実施）

2 会場：本校会議室

3 出席者 <委員>

加藤 正彦氏（泉北高等学校元校長）、奥井 博之氏（若松台中学校 校長）、兵野 寿江氏（泉北高等学校 PTA 会長）、田米 直美氏（泉北高等学校後援会 会長）

4 挨拶 校長

・学校経営計画の中間点検及び授業アンケート結果報告に基づいた協議会からのご意見をいただき、ご指導を賜りたい。

5 本年度の学校経営目標とその取り組みについて

① 平成 26 年度学校経営計画及び学校評価に対する進捗状況について（山本浩）

- ・確かな学力への取り組みについては、公開授業および授業参観の参加者数、学習時間の目標が未達成であり、さらに努力していく。
- ・国際理解教育の充実、科学教育の充実、進路指導の充実では、ほぼすべての項目で目標を上回っている。
- ・開かれた学校づくりや活気と規律のある学校生活においても、各項目でほぼ目標を達成している。

② 各分掌等の取り組みについて（教頭）

- ・各分掌の取組をまとめたものが、平成 26 年度学校経営計画の中間報告にあたり、その説明を終えたところである。

③ 第 1 回授業アンケート結果について（教頭）

- ・大阪府教育委員会の指導により、学校全体で行われた第 1 回授業アンケートの結果を説明する。第 2 回は 12 月に第 1 回と同じように実施する予定であり、どれくらい改善されたかという判断をする。
- ・他校と比較してよい結果が出ていると思われ、大きく改善する必要な項目はないと考えている。また、生徒からの文書による改善希望も総数としてかなり少ない。
- ・家庭学習の時間が少ないことが、必要な予習や復習をできている割合が少ないことにつながっていると思われる。昨年度は、2 年次で必要な予習や復習ができている割合が下がっている傾向があったが、今年度は年次が進むにつれてその割合が上がる傾向にあった。
- ・真面目に授業を受けているにも関わらず、興味関心を持ち知識技能が身についたと感じる生徒の割合が少ない。また、授業で使用するプリント等の教材に関する不満もみられる結果となってい

る。

- ・ 昨年の学校協議会の授業アンケートで、良い授業を示さなければ教員間の研究が促進しないと指摘を受け、今回の授業アンケートの各項目で好意的な回答を得た割合が高い教員 3 名の名前を公表している。
- ・ 各教科では第 1 回授業アンケート結果を受けて、改善に努めているところである。

④ SSH の取り組みについて（和田）

- ・ 堺市立若松台中学生対象の理科教室を開催し、サイエンス部の部員が指導などで活躍した。
- ・ 大阪学生科学賞でビオトープ池の研究で優秀賞である大阪府教育委員会賞を受賞。その他、課題研究やサイエンス部の研究成果を大阪サイエンスデイや「科学の甲子園」で発表している。
- ・ 課題研究発表の準備は例年通り進んでいる。
- ・ サイエンス部の取り組みでは、1 年生が 13 名入部し、外部の科学コンテストへの参加につながっている。
- ・ 国内の第 2 回サイエンスツアーの内容や事前学習をサイエンス部が企画した。
- ・ 「泉北こども科学フェスティバル」では 1 年生で「科学探求基礎」を受講している生徒が、小学生を指導する予定。
- ・ 生徒が主体的に学んで力がつくような SSH の取組を実践していきたい。

6 協議

(委員) 見学した英語の授業のような内容を本来なら中学校でも導入するべきであると思うが、なかなか難しい状況にある。英語や理科が思ったより伸びない生徒というのはいるのか。

→ (学校) 理科や数学が好きだという生徒すべてが理系の大学に進学することはなく、文系の大学に進学する生徒も一定数いる。

(委員) 英語の授業ではペアで意見を交わしながら授業を受けていた。中学校でもそうした授業を取り入れるように奨励されているが、実際には難しい状況にある。生徒同士が学びあう時間をどのようにして授業内で確保しているのか。

→ (学校) 基本的な内容について生徒同士で学びあう機会を少し設けることから、さらに難しい内容を生徒同士で学びあえるように指導を工夫しているようだ。

(委員) 英語の授業で使われていた英語のスピードが速く感じたのだが、あれは普通であるのか。

(委員) 英語の授業は衝撃的であった。ペアで楽しそうに授業を受けていたが、65分の授業で長いにもかかわらず、そのようなリズムのある授業はよいと思った。

(委員) 外国人の先生の発音のおかげで、外国に行ってもよいと思った。また、数学も覚えておくべきポイントを教えてもらっていて、よかった。

(委員) 授業が騒がしくなるようなことはないのだろうか。静かな授業であるが、本当に身につけて理解できているのだろうか。

→ (学校) いわゆる私語というものは授業ではあまりないように思われる。

(委員) 資料 5 より、多くの教科で講義型授業からの脱却とあるが、具体的にはどのようなことか。

→ (学校) ペアワークや ICT を導入することが、大阪府教育センターから推奨されている。

(委員) 遅刻数の減少も目指した指導で成功した例はあるのか。

→ (学校) 個々の担任および学年全体の指導に対する熱心な努力が最も重要である。それぞれの学年単位で遅刻を増やさない工夫をしている。一定の遅刻数を超えたものへの指導は生徒指導部として行っているが、担任の先生との関係を深めることで遅刻を減らすことができていると思われる。

(委員) 一番遠方からきている生徒はどこからきているか。

→ (学校) 八尾市や岬町などが最も遠いと思われるが、遠いからと遅刻することはあまりないようだ。

(委員) 自宅での家庭学習の時間は少ないのか。中学生ではどうか。

→ (委員) 中学校では個人差が大きい。塾で勉強する時間を除いた家庭学習時間増は課題だ。

(委員) 高校でも中学校と同じような状況か。

→ (学校) 大阪は、希望する高校に合格するために塾などで集中的に勉強した結果、その反動で高校2年生後半まで学習時間が少なくなる傾向にある。

(委員) 秋田では、習慣として帰宅したら復習と予習をしている。自宅に祖父母が住んでいることもあり、そういった習慣が継続できる要因であるそうだ。

(委員) 前期後期の入試がなくなるということだが、泉北として学校として重点をおいていきたいところは、英語と理数になっていくのだろうか。

→ (学校) 専門高校であるからには、これまでと同じように英語や理数に重点を置いていくべきだが、これからは進学実績をさらに上げられるように努力する必要があるのではないかと思う。